

エチナ牧畜調査報告

尾崎 孝宏・中村 知子

1. 調査概況

1-1. 調査目的・調査日程など

本調査報告は、中国内モンゴル自治区最西部に位置するアラシャン盟エチナ旗における、2002年冬季に行ったモンゴル族牧民の生業の現況に関する調査報告である。そもそも内モンゴル自治区全体において、1980年代より中国政府が進める「改革解放」政策に伴い、牧地の各世帯への分配などモンゴル族牧民の生業に多大な影響を及ぼす変化が生じている。その中で調査地域であるエチナ旗においては、単にそうした開発政策の影響のみならず、その立地の特殊性（極度の乾燥、河川オアシスであること⁽¹⁾）により、同時に環境変化・環境政策の影響も看過できない要素となっている。

そのため、本報告では、単に牧民の側の一方的な「社会変化」だけでなく、エチナ旗における環境変化を引き起こす要因としての「農耕化」とそれに伴う水利用形態の変遷についても注目している。なお、内モンゴルにおける農耕化はエチナ旗に限らない広域的な現象であるが、農耕化という現象の内モンゴル全体での普遍性とエチナ旗における個別性については、考察の部分で言及することにする。

本調査の日程及び活動については表のとおりである。本調査には、牧民の社会調査を行った尾崎孝宏・中村知子（鹿児島大学）の他に、黒河水系下流域に位置するエチナ旗の水文学的調査を行う別働班として秋山知宏（名古屋大学）および調査協力者として色音（中国社会科学院民族所）が参加している。また、現地調査においてはエチナ旗在住のアルタンツェツェグ女史の手配・紹介によるところが大きい。さらに、本調査の成果は、総合地球環境学研究所研究プロ

プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」における予備的データとしても位置付けられている。

表：調査日程及び活動

- 1月28日：日本出発，北京へ移動。色音氏と合流後，蘭州へ移動
- 1月29日：酒泉を經由しエチナ旗中心地（ダライフブ鎮）へ移動
- 1月30日～2月1日：エチナ旗で車両をチャーターし牧民の社会調査（尾崎，中村）および水文学的調査（秋山，色音）を行う
- 2月2日：酒泉へ移動
- 2月3日：酒泉滞在
- 2月4日：蘭州を經由し北京へ移動
- 2月5日：北京滞在
- 2月6日：日本帰国

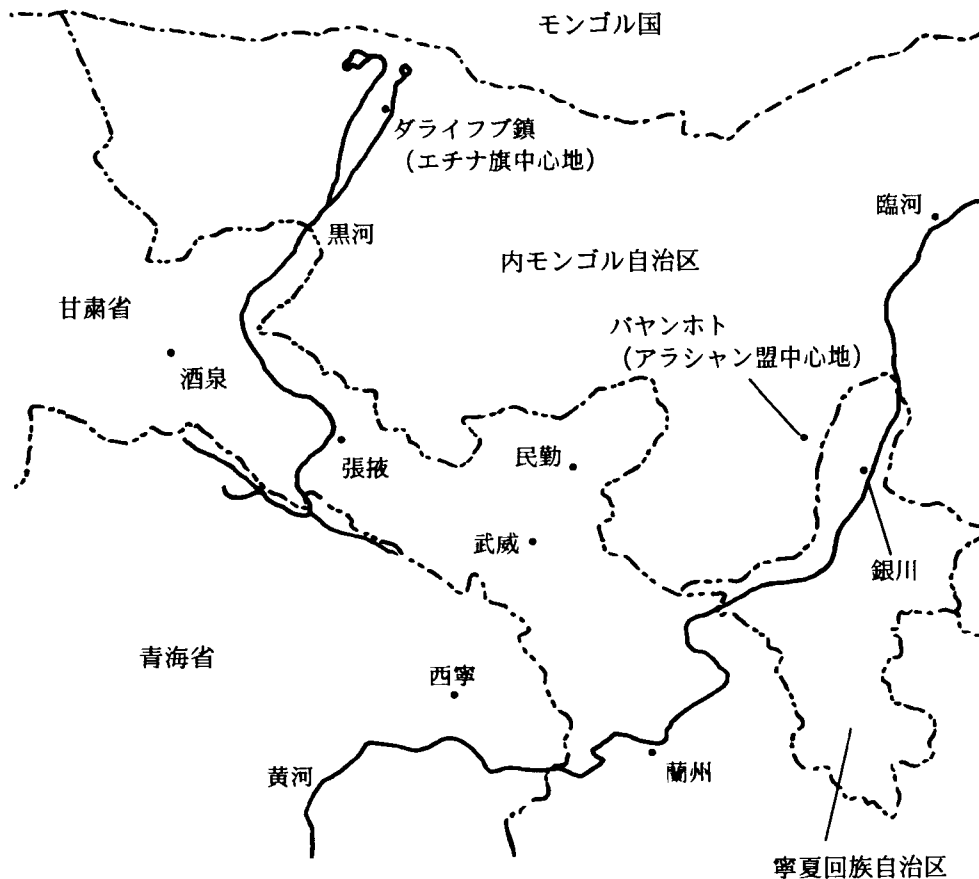


図1：黒河流域およびその周辺地域

1-2. インフォーマントのプロフィール

本調査における牧民のインフォーマントは合計7世帯であった。以下に、インフォーマントのプロフィール（インフォーマント名、ホトの位置および属性、家屋構成、年齢、家族構成、経歴）を示しておく。家屋の位置はGPSによる計測値である。なお、本報告中で言及されるインフォーマント番号は、全て以下のナンバリングを踏襲している。

No. 1 インフォーマント名：ドムツォー（世帯主の妻，63歳）

ホトの位置および属性：N42° 15′ 06.3″， E101° 06′ 44.5″（ソブノール⁽²⁾=ソム，ツェヘー=ガチャ領域内），通年居住地（夏はここから70 kmほど離れた，モンゴル国境から1 kmのゴビにオトルへ出る）

家屋構成：固定家屋3（うち1つは後述の婿の所有），倉庫1（最初の固定家屋は62年に建設）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦，未婚の子供2人），娘の世帯（夫婦，子供1人）

経歴：文革以前より現在と同じ場所に居住していた。かつては現住地が冬営地で，1 kmも離れてない場所に夏営地を構えていた。

No. 2 インフォーマント名：ペリンレー（世帯主，60歳）

ホトの位置および属性：N42° 16′ 40.7″， E101° 05′ 41.4″（ソブノール=ソム，ツェヘー=ガチャ領域内），冬営地（夏営地は東2 kmの地点，固定家屋あり）

家屋構成：固定家屋1，ゲル1（固定家屋は3年前に建設）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦，未婚の子供1人）

経歴：人民公社解体時に小家畜（ヤギ）を得たため，84年に川沿いの現住地へ移住してきた。それ以前は東にあるゴビに住んでいて生産大隊のラクダ飼（テメーチン）だった。出生地はバヤンボラグ=ガチャで61年に移住してきた。妻はツェヘーの出身。なお，現住地は84年以前，軍

隊が駐屯しており一般人は居住していなかった。

No. 3 インフォーマント名：バンドー（世帯主，65歳）

ホトの位置および属性：N42° 09′ 03.9”， E 101° 05′ 46.4”（ソブノール＝ソム， バヤンボラグ＝ガチャ， ガチャ中心地）， 通年居住地（夏には東に90km離れた， モンゴル国境から1 kmのゴビにオトルへ行く）

家屋構成：固定家屋1， ゲル1（固定家屋は70年に生産大隊が建てたもの）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦のみ）

経歴：83年に分配された牧地は現住地から20km離れたソブノール近辺のゴビだが， 水がないので10年前に牧地を放棄してバヤンボラグ＝ガチャ中心地へ移住。ガチャ中心地には， モンゴル族3世帯（牧民）， 漢族12世帯（農民）が居住している。

No. 4 インフォーマント名：ブド（世帯主， 56歳）

ホトの位置および属性：N42° 21′ 07.2”， E 100° 57′ 49.0”（サイハントーライ＝ソム， バヤンタル＝ガチャ， ガチャ中心地）， 冬営地（夏営地は3 km離れた地点， 固定家屋あり）

家屋構成：固定家屋1（固定家屋は80年に生産大隊が建てたもの， それ以前は同じ場所にゲル住まい）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦， 未婚の子供1人）

経歴：世帯主の両親はハルハ人で， 兄は文革を嫌って68年にモンゴル人民共和国へ逃亡した。人民公社時代， 世帯主は生産大隊の会計， 妻は医者だった。そのため， 83年に家畜を分配した際には10頭貰っただけ。その後， 娘婿が家畜を見るようになり200頭まで増やしたが， 売却により減少した。

No. 5 インフォーマント名：ドルゴルスレン（世帯主， 63歳）

ホトの位置および属性：N42° 21′ 26.7″， E100° 58′ 31.4″（サイハントーライ＝ソム， バヤンタル＝ガチャ領域内）， 冬営地（夏営地は1.5 km南， 固定家屋あり）

家屋構成：固定家屋2（固定家屋は89年に建てたもの）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦のみ）

経歴：世帯主は62～64年に生産大隊の会計， 81～83年に生産大隊の保管員（ニャラブ）だった。保管員だった当時， ガチャ中心地に住んでいた。人民公社解体時にここへ移住してきたが， 固定家屋を建てるまではゲル住まいだった。

No.6 インフォーマント名：バガナ（世帯主， 41歳）

ホトの位置および属性：N41° 59′ 31.7″， E101° 07′ 14.4″（ダランフブ鎮， ウスルングイ＝ガチャ領域内）， 通年居住地（全く移動せず， 完全な飼料飼育）

家屋構成：固定家屋1， ゲル1（固定家屋は96年に建てたもの）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦， 子供1人）

経歴：インフォーマントは現ガチャ党書記。土地は川に近く， 83年に家畜と土地を分配する以前もインフォーマントの父が居住していた。樹木が多くラクダ向きの土地ではないので， ヒツジ・ヤギのみ分配を受けた。

No.7 インフォーマント名：ゴンガー（世帯主， 66歳）

ホトの位置および属性：N42° 00′ 07.5″， E101° 12′ 41.7″（ダランフブ鎮， ウスルングイ＝ガチャ領域内）， 通年居住地（全く移動せず， 完全な飼料飼育）

家屋構成：固定家屋1， ゲル1（固定家屋は82年に建てたもの）

家族構成：インフォーマントの世帯（夫婦， 未婚の子供1人）， 扶養している子供1人

経歴：インフォーマントは58年から63年までガチャ長， 65年から98年ま

でガチャの党書記を務めていた。そのため、82年に固定家屋を建てるまではガチャ中心地にゲル住まい。扶養している子供（小学校高学年くらいの女子）は、両親が面倒を見なくなって放棄した子供を引き取ったもの。

なお、上記の主要インフォーマント以外の情報源としては、運転手（モンゴル族，ウントゴル＝ソム出身。両親は200頭のラクダ，数10頭のヒツジ・ヤギを飼っている牧民），バヤンボラグ＝ガチャ長（モンゴル族，No.3の聞き取り時に同席），No.4の妻が挙げられる。次章では，彼らから得られたデータについても適宜掲載している。

(尾崎孝宏)

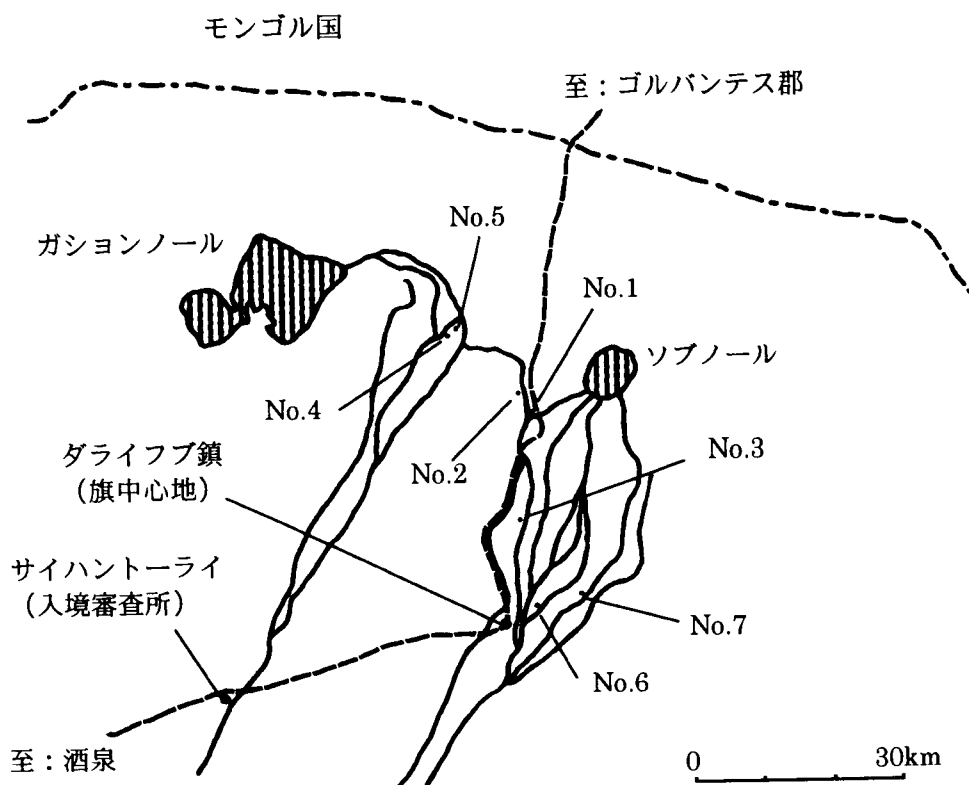


図2：インフォーマントの分布

2. 聞き取りデータより

2-1. 牧畜の現況（家畜関連）

家畜頭数はラクダ10数頭，ロバ4頭，ヒツジ・ヤギはホトで300頭，うちヤギ150頭。婿は小家畜のみ所有，ヒツジ・ヤギ200頭，うちヤギ100頭（No.1）

ロバは近距離放牧用として乗用する。現在，搾乳の対象はヤギのみ。ラクダは乗用にのみ使用，水が少ないので現在は搾乳しない（No.1）

2－3年前より国境警備隊の家畜を20頭ほど預託している。労働力に関しては家族のみ（No.1）

83年に人民公社が解体し，家畜を私有化した際，夫婦と息子2人，娘4人で40頭程度の家畜を受け取った。そのうちヒツジ5頭，残りは全てヤギ。現在の家畜は130頭。そのうちヒツジ5－6頭，ラクダ11頭（ゴビ在住の末娘のホトに預託），ロバ3頭，残りは全てヤギ。ウシとウマは現存しない（No.2）

放牧は家族で行っている。以前はラクダを放牧していたが，やはり1世帯で放牧していた。放牧頭数は80頭（60年代，母畜のみ）～180頭（70年代以降，ソバイも含む）（No.2）

現在の所有家畜はヒツジ70頭，ヤギ100頭，ラクダ20頭。全て私有家畜。今は自分の牧地には行かず，ガチャ中心地の家屋に隣接して作ったハシャーの中で，他人から飼料を買って家畜を飼養している。労働力は家族のみ（No.3）

生業形態は完全な牧民で農業は行っていない。理由は，バヤンタル＝ガチャは風が強い（草が砂に埋まってヤギが食べられなくなるほど。3～5月が一番強く殆ど毎日吹く）上に，ホジルが地表に出ているため。雨が無く水が来ないので，今年は草が無い。そこでボルトールと草を買って与えている。ここからモンゴル国境に至るまで人は住んでいない（No.4）

家畜頭数はヤギ120頭，ヒツジ30頭，ラクダ12頭，ロバ1頭。ヤギは搾乳し，スーテーツァイ，ツァガンイデーを作る。但し去年は草が無いので搾らなかった。こういうことは初めてではないが今年は特にひどい。この他に鶏を飼っており，卵を食べる。春は肉も野菜も無いので便利（No.4）

83年の家畜の分配では、50頭のラクダ、80～90頭のヒツジ・ヤギを得た。現在の家畜頭数はヒツジ60～70頭、ヤギ100頭、ラクダ50頭、ロバ1～2頭。ラクダも自分の土地で飼っている。去年も水が来なかったので、牧草の状態は悪い。ラクダは搾乳しない。肉は食べる。ヤギは少し搾乳するが、今年は草が無いので搾乳しなかった（No. 5）

83年に家畜と土地を分けた。ヒツジ・ヤギ120頭、ラクダ20頭が分配されたが、ラクダはガチャに返却した。当時、家には父（現在死亡）と妹（現在は結婚して旗中心地にいる）しかいなかったもので、労働力が不足していた上、分配された土地（川の近く）はラクダには向かず、南のザグ地帯で別個に飼う必要があるため、不要と判断。当時、本人は軍隊にいて、84年に戻ってきた（No. 6）

現在の家畜頭数はヒツジ60頭、ヤギ200頭少々で合計300頭。鶏も数羽いる（No. 6）

現在、全て飼料で家畜を飼養しなければならなくなった。理由は胡楊を保護するため。去年、国家レベルでそういう決定が出た。家畜頭数の上限は設定されていないが、自分で飼料を調達する必要がある（No. 6）

現在の所有家畜はヒツジ50頭、ヤギ250頭、ウシ4頭（うちメスウシ2頭）、ウマ1頭（放牧用）、ロバ2頭。家畜飼養は娘が中心で、家族3人で行う（No. 7）

人民公社時代も、1世帯で牧畜を行っていた。200頭なり300頭なり、労働力に応じて割り当てられていた（No. 7）

85～90年ころ、600頭はヒツジ・ヤギがいたのだが、今は300頭。来年はもっと減らす予定（No. 7）

ガチャの現在の人口は240～250人、60戸。うち漢族40～50人、12戸。モンゴル族は殆ど牧民、漢族は殆ど農民。漢族は83年以前から住んでいた。ある者は60年代、ある者は70年代に移住してきた。農民には83年に農地が分配され、7～8戸が受け取った。ほかに家畜を分配された者も2戸くらいいた（No. 7）

現在でも新しく世帯を持てば、ガチャが牧地か農地を分配してくれる（No.

7)

牧地の半分は土地を分配してすぐに囲った。残り半分はここ2年くらいで囲った (No. 7)

2-2. 牧地, 季節移動

分配された土地の広さは数千ムーあるが、今は遠くへ放牧に行かない (No. 1)

雨の少ない年には夏 (4~10月半ば) のオトルは出ない。去年はオトルへ出た。オトル先は旗の土地で、井戸もある。トラクターでゲルと家財を運ぶ。家畜は歩きで、所要日数2日 (No. 1)

去年の春、牧地を分けたのにまだ使用証が来ていないので、牧地の正確な広さはわからない。ここはラクダ向けの土地ではない。ラクダはゴビが良く、逆に小家畜は川が必要。公社解体時に小家畜を得たので川沿いの疎林 (ソハイ=タマリスクの意) に転居した (No. 2)

冬営地から2~3km東に行くと疎林がなくなりゴビになる。夏営地は疎林とゴビの境目にある。水がある年は夏季、ゴビへ放牧に出る (No. 2)

所有家畜はヒツジ70頭、ヤギ100頭、ラクダ20頭。全て私有家畜、自分で放牧 (No. 3)

ここ10年、自分たちに分配された牧地であるソブノールのゴビには行っていない。水が無いので、5mや10mの井戸を掘っても水は出ない。元々、そちらに夏営地・冬営地ともにあった (No. 3)

現在、夏のオトル先ははるか東のゴビ。ゲルを持って行く (No. 3)

牧地は83年に分配された。分配された当時から少しずつ囲い始め現在は完全に囲ってある。そうでないと、草をめぐって他人とトラブルになるため。広さは1万ムーあるが、大体が役に立たない。モンゴル国側には水が無い。西には別のガチャがあるため、そちら側の土地は使えない。60年代には水が来ていたが、だんだん少なくなって今では全然来ていない (No. 4)

6月から9月か10月位まで夏営地に住む。85年に建てた小さな固定家屋があ

る (No. 4)

夏営地は1.5kmくらい南にあり、冬営地とは別々に囲ってある。インタビュー開始当初、主人は夏営地の井戸へ家畜を連れて行っていた。夏営地にも3部屋の固定家屋とゲルが2つある。土地の広さは7,000~8,000ムーくらい (No. 5)

土地は一塊の土地を3,000ムーほど分配された。元々、自分たち家族が住んでいた場所である (No. 6)

土地の中に6~7つの囲いを作っている。これと井戸で数万元の金を使った (No. 6)

牧地の広さは6,000~7,000ムーだが、今は草が無いのでハシャーの中で舎飼いにしている (No. 7)

2-3. 水の確保

所々、川の水を引くための堰がある。コンクリート製で、大抵3~4方向の水をコントロールしている (運転手)

固定家屋の近くにある井戸は深さ60m、60年代に生産大隊が機械で掘った。家畜用で、人が飲む水はガチャ中心地から運ぶ。トラクターで大きな器を持っていけば1週間持つ。家の傍と旧夏営地には手掘りの浅い井戸があったが、80年代から水が少なくなり、現在は単なる穴 (No. 1)

近くの川は、夏には水が無くなる (あるのは5月くらいまで)。家ごとに畑に使うのと、植林地にも水を使うため。インフォーマント宅でも、牧草と木のために水を引いてくる (No. 1)

人の飲料用は夏営地にある井戸 (60年代に軍が掘ったもので、鉄パイプを垂直に埋め込んだようなもの)、家畜は冬営地の井戸水を使う (深さ9m)。飲料水は通年、夏営地からロバ車で運んでくる (No. 2)

敷地内の井戸は水が悪い。家畜用に使う。畑に水をやっているため、年々、水が減っている。以前は2~3mで水が出て、しかも飲めたが、今は10m掘っても出ない。以前は雨も良く降ったし、冬には雪も多かった。現在、飲料水は4~5km離れた井戸 (深さ180m) から取ってくる (No. 3)

手動の井戸（浅い）の水は苦くて飲めない。ガチャ中心にある井戸（旗の援助で84年に作った、130 mほどの深さ。）しか飲めない。ガチャには6本深井戸がある。最初の物は60年代に作った。そのうち一本は彼らの夏営地にある。最初の深井戸を掘る前は河の水を使っていた。当時は一年中途切れなかったし苦くもなかった（No. 4）

夏営地にのみ井戸がある。82年に旗が作った物。140～150 mの深さで自噴。冬場、家畜に水をやる時には夏営地かガチャへ1日1回行く。この辺では少々掘っても水は出ない（No. 5）

自分の土地にある井戸の深さは12～13 m。以前は4～5 mで「深い」井戸だと言っていたが、今は10 m掘っても水は出ない（No. 6）

川は非常に近い。土地の両側に二本流れている。ただし、甘粛省内に24ヶ所ダムがあるので夏には水がなくなる（No. 6）

井戸は、85～6年に作ったモーター式の井戸が1つある。深さ60 m。ただしこの井戸の水は飲めず、2年前に掘った手動の井戸のほうが飲める。彼らの土地にはたくさん井戸が掘ってある（No. 7）

2-4. 畜産物の販売

ヒツジとヤギを口岸の食堂に売る。年に4回、年間で50～60頭売っている。売却価格は、オスヒツジ400元、オスヤギ300元、メスヒツジ200元、メスヤギ100元程度（No. 1）

カシミヤは春に臨河から買付けに来る。価格は1 kg300元。去年は60kgのカシミヤを売った。（No. 1）

皮は、商人がバイクでやってきて買付ける（No. 1）

家畜（ヒツジ・ヤギ）は秋に30頭売却した。他の季節には売らない。売却先は近くの漢族農民で、彼らは別の場所へ運んで転売する。カシミアは30数斤売っただけ。他にはラクダの毛を売る（No. 2）

ソム中心地にもバグ中心地にも店は無い。買い物は旗中心地。売却は旗中心地か訪問してくる商人。商人は常に他所の漢人で、モンゴル通いが長い者はモ

ンゴル語を知っている。彼らは転売目的で買うばかりであり、一定の顧客関係は存在しない。河北、臨河の者が最も多い。特に河北は、外国への輸出基地となっているため、カシミアや皮革の相場が一番高い。他に銀川、甘肅などからも来る (No. 3)

現在の収入源は家畜・カシミアの売却と、息子 (18歳) が綿花収穫を手伝う賃金 (No. 4)

去年、主人の妹の子供 (両親は早くして亡くなったので引き取った) が結婚した時は60~70頭の家畜を売った。普段の年は食糧や日用品、飼料を買うために10数頭の家畜を売っている (No. 4 妻)

今年は家畜をたくさん売却した。ラクダ10頭、ヒツジ・ヤギ20頭。草の状態が悪かったので飼料を買うためと、税金を払うため (No. 5)

ラクダの相場は300~700元くらい。ただし、最低は200元、最高 (大きい、太った個体の場合) 1,000元と大きな幅がある。また、ラクダの毛はキロ当たり12~13元 (No. 5)

現在、利益の出る動物はラクダとヤギ。前者は良い値段で売れ、後者はカシミアが取れる。ヒツジは肉だけ。ヒツジの毛は2元/斤で、値段が無いも同然 (No. 5)

年間で50~60頭の家畜を売却。また、ヒツジ・ヤギを問わず20頭を自家消費する (No. 6)

家畜は年間で50~70頭売却、売却先は旗中心地の肉屋。エチナには肉を加工する工場は無い。30頭ほどを自家消費。カシミアを100斤、羊毛を100斤売却、売却先は外からやってくる商人 (No. 7)

2-5. 農業・農産物

飼料としてポルトールを使用。去年は国家からの配給が3,000斤あった。乾燥していて硬いので、煮てから与える。その他、国境警備隊から小麦の粃殻をポリタンク五杯分もらった。そのため、去年は飼料を購入しなかった。飼料はメスや病気の家畜のみに与えるが、毎日与えるには不十分な量しか確保してい

ない (No. 1)

水さえあれば自分で飼料作物を栽培するが、水が無いから植える事が出来ない (No. 1)

4年前、旗の指導で漢族の農民を導入した。ここ2～3年、すぐそばで飼料を作っている (ポルトール, トウモロコシ, 小麦)。畑の面積は飼料, 綿花の合計で3ムー。他からは飼料購入せず。ただし今年は国家から配給があった (No. 2)

綿花も3年ほど作って現金収入を得ている。今年は綿花で2,900元の収入があった。綿花は旗中心地にある工場へ売る。工場では四角い箱状のものに加工するだけ (No. 2)

バヤンボラグ＝ガチャ中心地に住んでいる漢族は全て農民で、綿花やポルトールを植えて売っている。彼らは65年以降に来たが、出身地は様々 (甘肅, 山東, 河北, 民勤など, エチナ旗には合計13地域の漢人がいるという)。かつてエチナ旗の幹部は皆漢族であった。彼らが兄弟親戚を呼んでくるため、現在のように漢族農民が増えた (No. 3)

83年に土地を分配した。決まった広さはなく、各世帯に数千ムーずつ、一塊の土地を分配。家畜は一人にヤギ36頭, ヒツジ7頭, ラクダ6.5頭。農民に対しては一人10ムーの農地を分配。現在ガチャの世帯数61 (うち漢族12), 人口206人 (うち漢族76人) (バヤンボラグ＝ガチャ長)

モンゴル人は農業はできない。自分たちは農業をしていない。現在は、毛を売ったお金で飼料を買って暮らしている。特に決まった相場は無いが、トウモロコシで7～8角/斤。ポルトールも少し消費する。お金があれば (毛が良い値段で売れば) 飼料をたくさん買えるし、そうでなければ家畜を売却する (No. 3)

この辺の農民は基本的に漢族。漢族は一人やってくると、兄弟や親戚を呼ぶ。最近では、モンゴル族でも農業をしている。モンゴル族も漢語ができるし、漢族も放牧を覚えたりして、区別がつかなくなっている。モンゴル＝漢の通婚も少なくない (No. 4 妻)

飼料として、冬の前にトラクター2台分の乾草と2,000斤のボルトールを買った。ボルトールのほうは春には不足する。草も惜しみなく与えれば春には不足する量。夏にも飼料を与えるかどうかは、状況による。自分の土地以外に、オトルへ行くような場所はない (No. 5)

去年は2,000斤のボルトールと車4～5台分(重量換算では20,000斤)の草を購入。そのほか、100ムーほどの畑を所有しており、ボルトールを自分で作っている。また、漢族と契約して綿花を作らせている(取り分は半々、作付け面積は年により異なる)。以前は穀物も作っていた (No. 6)

今後は、自分の畑全てで飼料作物を作る予定。新しく作った家畜囲いには、一年中囲いの内で飼えるように、飼料を外から入れやすい構造になっている (No. 6)

畑は、川の水をまず使う。この広さ(100ムー)では、川の水を使わないで灌漑することは難しい。川の水が足りなくなると井戸の水を使う。畑にも数本の井戸が掘ってある (No. 6)

現在、飼料は年間2,000斤購入している。来年から、草・ボルトールを20～30ムー植える予定 (No. 7)

エチナ旗では穀物は作っていない。多いのは綿花とハミ瓜。後者に関しては、夏は暑く乾燥するので上質なものができ、北京へ出荷している(運転手)

2-6. 品種改良

現在、頭数の増加よりもむしろ、品質を上げることが推奨されている。ただし、シリングルなどと違って集約的にやっているためコストが高くついてしまう (No. 6)

昨年9月に改良種のおホン(種オスヤギ)を導入。ヤンワンイーという漢族の人とアイマクに行って白いカシミアの取れるおホンを5頭買い、1頭は他人に与え、2頭ずつ分けた。購入価格は1頭あたり500元。こちらで買うと600元、人を通して買って来てもらうと700元かかるという。在来種では1頭から半斤(4ラン)しか取れないが、改良種だと7ランのカシミアが取れるという (No. 6)

2-7. 国境（口岸）との関わり

口岸は3, 6, 9, 12月の1~20日に開く。モンゴル国側から持ってくるのは皮, 羊毛, カシミヤ, 飴など。こちらからは日用品を持っていく。エチナ旗から策克口岸まで60km。口岸から国境まで18km（運転手）

口岸も旗中心地も同じ距離なので, 買い物は口岸か旗中心地。家畜の売却は口岸, ロシア製の飴も口岸で買ったもの。ツァガンイデーは旗中心地で購入した。口岸には固定家屋が3軒ある（No.1）

主人（No.4）は兄（モンゴル人民共和国に逃亡した後に結婚）や親戚を訪ねて90年の冬にウランバートルとウムヌゴビ県に行ったが, パスポートを取るために北京を経由せざるを得なかった。ウランバートルは寒くて驚いたという。また, ハルハの人々が常食にしているツァガンイデーが食べられなかったらしい。ここ4~5年はモンゴル国との通信は自由。口岸も4, 5年前に開いた。その当時は, モンゴル国の人々はみんな自分で作ったデールを着ていて驚いたが今は中国製の服を着ている（No.4妻）

口岸には行かない。二人で放牧しているので忙しいから。家畜や畜産品の売却は商人が来た時, 買い物は旗中心地です（No.5）

2-8. 食生活関連

燃料は全て木（ソハイ）を使用, 畜糞（アルガリ）は使用しない（No.1）

冬場は搾乳しないので, 茶は塩の入らないハルツァイを飲んでいる。ツァガンイデーも購入してきたもの（No.1）

塩の入らないハルツァイのほか, 塩の入ったスーテーツァイも飲むが, 粉乳を使用したもの（No.2）

ツァガンイデーは, 自分で作ったもの（ヤギ乳を利用）。去年は乳がたくさん取れたので。ツァガンイデーや肉をたくさん食べられれば穀物の消費量が減る。去年は穀物を一ヶ月に10数斤~20斤買っていたが, 現在は50~60斤買っている（No.3）

人民公社時代, 穀物は1斤3角だったのが, 今は1元以上する。1斤の肉は

20ムング（2角？）だったのが、8元になっている。70～80年代（83年以前）にはガチャ中心地の共同調理場（ニーゲミン＝バイシン）に大きな鍋が1つあり、そこで調理していた（No.3）

小麦粉と植物油でボーブを作り、接客のために供された（No.4）

草が良い年だけ搾乳をする。ただし、今は搾乳する世帯は非常に少ない（No.6）

茶は塩入りのハルツァイを飲む（No.6）

小麦とヨーグルト（ツァガー）から自家製のパンを作る。ここにはメスウシが2頭いて搾乳するため、温めた牛乳やスーテーツァイが接客のために供された（No.7）

ツァガンイデーは牛乳からツァガー・ウルムなどを作っている。ヤギは搾乳しない。メスウシにはボルトールを与えている（No.7）

2-9. その他生活状況

2000年の春節に電気を引いた。近くに家畜飼料用の畑（国営）があり、そこまで旗中心地から電気が来ていたので、そこから先は自力で引いた（No.1）

風力発電機と衛星放送受信用のパラボラアンテナを所有している（No.2）

現在電気は来ていない。発電機は持っているが、石油が高いので普段は蠟燭の明かりを使用する生活である（No.4）

無線電話・携帯電話のほか、自動車（ロシア製のNIVA）も所有している。ただ、自分は幸運な1%に属すると認識している（No.6）

電話は無線電話を所有、電気は旗中心地から引いている（No.7）

2-10. 過去の状況との比較：彼らの認識

エチナ旗が内モンゴル自治区に入ってから（79年）甘粛省は水をくれなくなった（No.1）

10年前までは、現住地から1kmも離れていない場所に夏営地があった。当時は水も草も良かったため。かつては雨も良く降り、草が良く生えた。ソブノール

(ここから10数km), ガシオンノールともに水があった (No. 1)

文革の時期, 国境近辺は軍隊しかいなかったため, 他の地域から下放の人々は来てない。ただし, 自分たちはそれとは無関係に居住していた (No. 1)

インフォーマント夫婦は地元の人だが, もともと, この地方の住民は全てモンゴル族の牧民だった。また, 70年にガチャ中心地に固定家屋を建設したが, それより前にはゲルしか存在しなかった (No. 3)

漢人が移住してくる以前には各季節の営地はあったが, それぞれ非常に近かった。移動する必要が無かったので。だが, 川沿いの(水が出る)土地は漢族の綿花畑になってしまったし, 草地に水はなくなった。ここ4~50年の変化は大きい (No. 3)

毎年毎年家畜の数が減ってきているのが現状。80年代にはガチャでヤギが1万頭, ラクダが900頭いた。現在はヤギが3,000頭, ラクダが400~500頭にまで減っている。飼料が買えないと家畜を手放さざるを得ない。また, 狼の被害に遭ったのもいる (バヤンボラグ=ガチャ長)

83年に家畜を分配する前には, 1世帯で400~500頭の家畜を放牧していた (No. 3)

60年代にはここにもウシやウマがいた。砂嵐も無かった。それなのに去年はスーテーツアイも飲めなかった。当時も冬営地と夏営地はあったが距離は近かった。ガシオンノールは60年代から小さくなり始め今では完全に干上がっている (No. 4)

80年代まで年4回の移動生活をしていた。83年から綿花畑が増えた。人民公社時代にも綿花畑は存在したが面積は少なかった。公社時代には食糧(穀物)も作っていたが, 今は売れる物(ウイルドベリン=チャナルタイ)しか作らない (No. 7)

ウマは, 以前は「ネグ=タルバイ」⁽³⁾で1,000頭いたののだが, 今は100頭いるかどうか (No. 7)

(尾崎孝宏)

3. 文献データより

3-1. エチナ旗の行政的変遷（中華人民共和国成立以後）

- 1949 中華人民共和国成立。甘肅省酒泉の代官が就く。
- 1951 エチナ旗自治区と改称。
寧夏省の管轄となる。（2月）
- 1954 寧夏省と甘肅省合併後，張掖の派出機関の代官が就く。
酒泉派出機関の管轄に。（11月）
- 1956 内モンゴル自治区バヤンノール盟の轄属に。
- 1969 甘肅省酒泉地区の管轄。
- 1979 内モンゴル自治区の管轄に戻る。
- 1980 アラシャン盟が正式に設置され，アラシャン盟の管轄になる。

3-2. 人口分布及び人口変化

以下のデータは、『内モンゴル自治区地名志 阿拉善盟分冊』（内モンゴル自治区地名委員会1991）より抜粋したものである。なお，編集後記より判断して，記載データは1988年現在のものと思われる。

・ダライフブ鎮（達来呼布鎮：旗中心地）

7,100人：モンゴル族1,506人，漢族5,421人，その他の少数民族173人
総面積35km²。耕地40ヘクタール。

鎮は4つの居民委員会に分かれている。

- ・蘇泊淖尔路居民委員会……2,574人
- ・吉日嘎郎凶路居民委員会…1,524人
- ・居延路居民委員会……………1,975人
- ・新村居民委員会……………1,029人

・ソブノール＝ソム（蘇泊淖尔蘇木）

1,537人：モンゴル族528人，漢族1,004人，その他の少数民族5人
総面積4474km²。

大家畜5,882人，小家畜24,155頭。（1986年6月時）
ソムは6つのガチャに分かれている。

- ・ジャルガラント＝ソム（吉日嘎郎凶蘇木）※No.7によると，現在はダライフブ鎮に吸収された，とのことである。

1,343人：モンゴル族721人，漢族598人，その他の少数民族24人
総面積3,666km²。

家畜36,811頭：大家畜6,707頭，小家畜30,104頭。（1986年6月現在）
ソムは5つのガチャに分かれている。

- ・サイハントーライ＝ソム（賽漢陶来蘇木）

1,179人：モンゴル族622人，漢族545人，回族と藏族12人
総面積約20,000km²。

家畜33,828頭：大家畜5,276頭，小家畜28,522頭。
ソムは5つのガチャに分かれている。

- ・ウントゴル＝ソム（温図高勒蘇木）

434人：モンゴル族294人，漢族122人，その他の少数民族18人
総面積14,809km²。

家畜12,773頭：大家畜6,654頭，小家畜6,119頭。
ソムは2つのガチャに分かれている。

- ・グルネー＝ソム（古日乃蘇木）

566人：モンゴル族398人，漢族167人
総面積14,088km²。

家畜17,246頭：ラクダは全家畜頭数の約四分の一，小家畜12,793頭。

ソムは2つのガチャに分かれている。

・ マーゾンシャン＝ソム（馬鬃山蘇木）

64人：モンゴル族46人，漢族18人

総面積約10,000km²。

家畜663頭

ソム内にガチャなし。

・ エヘンチャガーン牧場（額很查干牧場）※現在のバヤンボグド＝ソム（巴彥宝格德蘇木）に当たる。1994年に変更。

614人：モンゴル族322人，漢族282人，その他の少数民族10人

総面積約10,000km²。

家畜26,256頭：大家畜5,769頭，小家畜20,467頭。

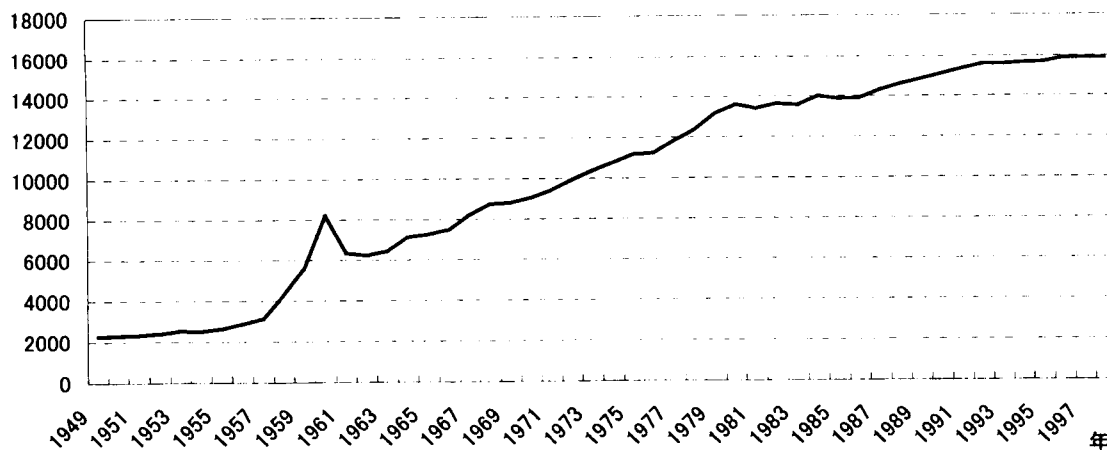
・ バヤントーライ農牧場（巴彥陶来農牧場）

1,118人：98%漢族

総面積約75km²。

家畜7,178頭：ブタ約300頭

1949-1998年エチナ旗人口統計グラフ



（額濟納旗誌編纂委員会1998：154－155），（内モン自治区統計局〔編〕1991：647），（内モン自治区統計局〔編〕1994：464），（内モン自治区統計局〔編〕1997：543），（内モン自治区統計局〔編〕1999：572）より作成。

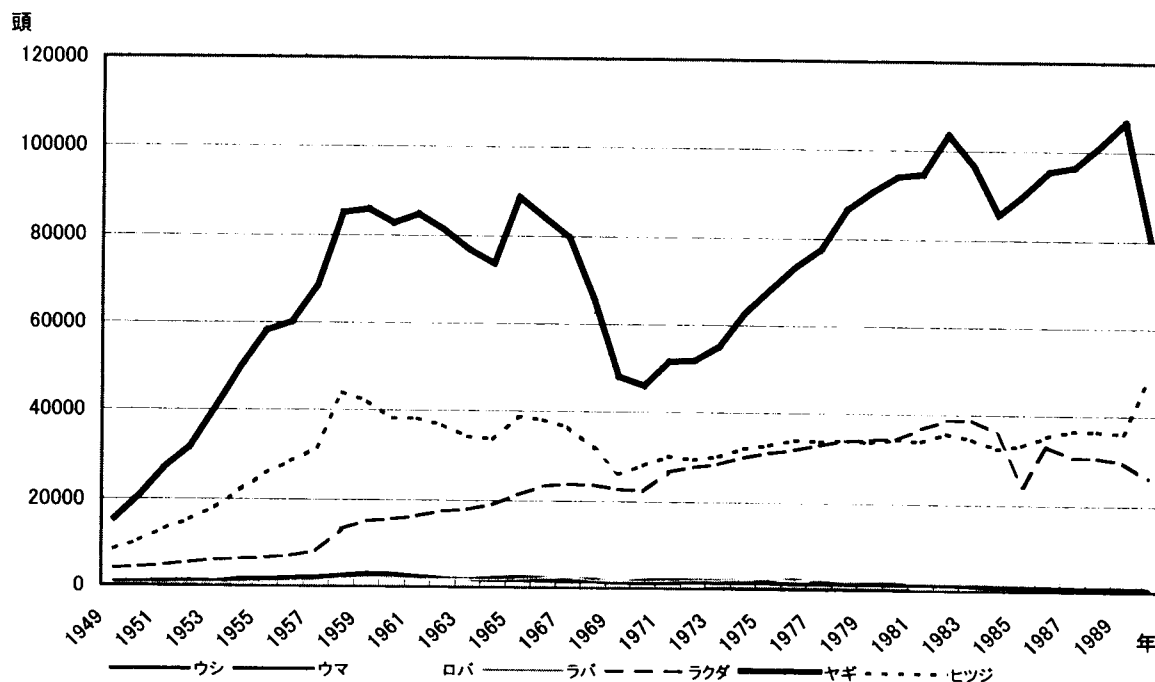
3-3. 家畜頭数の変遷

エチナ旗は水資源が乏しく土壌も貧弱という劣悪な環境である。そのためこの様な条件に耐えうるラクダ，ヒツジ，山羊が主という，他の地域とは異なる家畜構成になっている（額済納旗誌編纂委員会1998：200）。

・ラクダ

1949年	3,945頭	エチナ旗旧トルグート特別旗解放時
1958年	13,420頭	人民公社化時期
1965年	21,304頭	
1983年	38,813頭	中華人民共和国成立以後最高値
1987年	30,662頭	
1990年	26,158頭	

1940-1990年エチナ旗家畜頭数



(額済納旗誌編纂委員会1998：209-211) より作成。

・ヒツジ (ヤギ含む)

1949年	23,959頭	全牲畜の81%
1958年	129,300頭	人民公社化時期 全牲畜の87%

1965年 127,542頭

1978年 120,479頭

1990年 129,490頭

3-4. 放牧方法の変遷

1949年エチナ旗の和平解放後、中国共産党人民政府の指導のもと全旗畜牧業は迅速な発展をとげ、牧民も“瞭牧”（引用者註：基本的に放し飼いで、時々群れを見に行く放牧か？）“天牧”（引用者註：日帰りで日中は放し飼いの放牧か？）といった遅れた生産方式をだんだんと変えていった。50年代初めには“跟牧”（引用者註：畜群に常時人がつく放牧か？）制度が開始された。そして1958年人民公社化以後、全旗牧畜は“定居游牧”と輪牧（草原地帯をいくつかの区に分けて順繰りに放牧すること。）制度を実行した。いくつかの畜群は二期の游牧方式を採用し（冬春は定拠点で放牧し、夏秋はオトルに出て冬春の草場を再生する為に保護する）、いくつかの畜群は三場四場と移牧し、三季四季輪牧する（額済納旗誌編纂委員会1998：204）。

3-5. 品種改良

エチナ旗の家畜に関する品種改良は50年代に始まった。40年代の中ごろ10数種類くらいの優良品種（三河馬、三河牛、草原紅牛…）が導入され、旗全体で畜種改良が行われた。指導が強まり、1961年3月、旗人民委員会は「良種小畜管理試行方法について」を制定した。しかし、この地の飼育条件と気候植生条件に対する順応能力を考慮しなかった為に、品種改良でカシミヤヤギとラクダの選育の成功以外では、品種改良は僅かな効果しか上がらなかった。

70年代末期、旗人民政府と広大科技工作者はエチナ旗の牧畜業生産発展の経緯をまとめ、カシミヤヤギとラクダを主とする選育方針を確定した（額済納旗誌編纂委員会1998：208）。

・ヒツジの改良

1954年二匹の新疆細毛種の種オスヒツジを導入。耳番号13号と83号。7月20日から9月末までの間に三バグ政府の所在地である老西廟で配種が進められた。45日以内に母羊52匹と交配し、そのうち43匹が妊娠、受胎率は84%だった。

1958年旗第三廟人民代表大会第二次会議において“すぐに家畜の頭数を緊急に発展し、また普遍なる家畜品質を向上する”という精神のもと、12月23日旗人民委員会は《綿羊改良活動に関する緊急告知》を印刷して配布した。1959年旗全体で綿羊の品種改良促進が始まり、旗内に5つの交配所が設置された。この年改良綿羊は9,700頭となった。

1962年の統計によると、エチナ旗に相次いで新疆細毛羊が66頭導入され、品種改良された羊は計22,219頭となった。品種改良を通して、改良種一代目の綿羊は平均2.5kgの毛を産出し、二代目は4.3kgの毛を産出する結果になった。土着の羊と比べその産毛能力は1.5倍高くなった。

1960年種オスを人民公社の管理に移管した。しかし飼育管理経験不足のため、管理が悪く種オスの栄養状態が悪化し、交配能力を失い死に至るケースも起きた。調査によると、1963年までに死亡した種オスは19頭であり、その中で病死は17頭、溺死、絞死は一頭ずつであった。この数値は導入された頭数の28.7%にあたる。(中略)

1966年全旗でカラコル綿羊を導入する。ウントゴル、グルネー、ジャルガラント、ソブノール等の公社と国营牧場で交雑改良が進められる。1968年バヤントーライ農牧場にカラコル綿羊養殖場が設置される。1970年種オスが紅旗牧場に移され改良終了後、1987年までにカラコル綿羊は絶滅した。

1978年甘肅省肅北県石宝城から8頭の細毛綿羊が導入され、翌年ジャルガラント公社で細毛羊と当地の蒙古羊の人工授精が行われる。受精した母畜は全部で30数頭であった。見た所子羊の体質は、外見は純粋な細毛羊に近く、産毛量は土着の種と比べて1～2倍高かった。しかし、雑種の羊は飼育管理条件が多く、当地の自然条件に適応する能力が低かった為最終的に改良は停止された(額濟納旗誌編纂委員会1998:208)。

・ヤギの改良

1979年遼寧省蓋県からカシミヤヤギを導入し、サイハントーライ公社の安都草原に専門のカシミヤヤギ試験中心群を作った。1983年にさらに30頭のカシミヤヤギと土着のカシミヤヤギを交配し改良した（額済納旗誌編纂委員会1998：208）。（中略）

（しかし）導入された種オスはこの地の乾燥気候と旱魃で荒廃した草場に適應せず、喘息を引き起こし弱り、死に至った。その為改良を中断した。

1985年から1988年に、アラシャン左旗ホンゴル玉林から良種のカシミヤヤギ106頭を、アラシャン右旗ヤブライからカシミヤヤギ208頭を導入し、サイハントーライ、ソブノール、ジャルガラントの3つのソムとエヘンチャガーン牧場に分けて放牧し、面積を拡張した。この結果23群が選択して育成され、4,789頭になるという比較的良好な効果をあげた（額済納旗誌編纂委員会1998：209）

3-6. 環境の変化—災害—

1959 春夏秋と連続して旱魃。家畜16,076頭死亡。直接経済損失（およそ）160,760元。

1960 大旱魃。10月末までに、土を十分に湿らせる雨は一回降っただけ。

エチナ河（黒河）は、10月7日には毎秒3 m³で水が流れていたのが11月18日断流。地下水位が低下し、また水のアルカリ度化が進み、140,000頭の家畜が水を飲むのが困難な状況になった。

1961 春から夏にかけて風が強く、全鎮の気温上昇（黒城一帯が特に）。

1962 エチナ旗で旱魃の被害が深刻だった草場面積は2,500km²（全草場面積の50.4%）。

死亡家畜9,823頭（旗の家畜総数の6.79%）。

1963 河の水量、降雨量共に少ない。寒波、暴風の日数も多い。1962年より旱魃はひどい。

地下水位が1.5から2 m下がった事により、草状態が悪く家畜約4,800頭が死亡した。

- 1970 200日旗内の河川に水なし。降水量は11mm。
- 1971 ダライフブ鎮近区では，1970年8月19日～1971年5月31日の285日間降水なし。
エチナ河（黒河）に二回水が流れたものの流量は僅かで東居延海までは至らなかった。その為東居延海は5月に干上がっていた。また地下水位は下降し牧区の筒型井戸の水面は2～3 m下降。水質も変わり，人が飲むと下痢になり家畜が飲むと軟骨症となった。6月に一回冷たい雨と雪が降り，4,800頭の家畜が死亡。
- 1973 5月16日～5月17日に，雪まじりの雨を伴う暴風が吹く。
17日の気温は－6℃まで下がり，農作物の30～50%が凍傷の被害を受ける。
- 1976 全旗で異常気象。河水は減少し降雨も無く早魃が深刻に。
砂嵐の日数も多く虫害もひどい。草状態が悪く約4,530頭の家畜が死亡。
- 1979 4月10日20時天気が急変し，7～8級の西北の突風が吹く。最大瞬間風速25 m/s。
風雪が11日0時まで続き，気温は－10℃まで下がる。羊小屋内の積雪は約66cmに達し，約6.6cmの氷が張った。最も被害が深刻な地域は国营牧場（引用者註：原文のまま）とマーゾンシャン地区であった。川沿い国营農場の小畜群30個の統計では家畜294頭死亡（山羊綿羊139頭，子羊148頭，子ラクダ7頭）。マーゾンシャン地区の凍死牲畜は159頭（ラクダ53頭，羊106頭）
- 1980 “倒春寒”（春の嵐）がひどく，夏後半まで早魃の状態が続く。
春から夏まで降水量7.5mm。夏後半になると，ダライフブ近郊では気温が41.6℃まで達し，また拐子湖地区（引用者註：現在のウントゴル＝ソムに当たる）では最高気温43.2℃を記録した。早魃，高温が続き草原や森林では広範囲で虫害が広がり，枯れる，育成不良などの被害を受ける。また毒草がはびこり家畜が謝って食べ，中毒を起こすという被害が深刻化。

地下水位も下降し、マーゾンシャン地区では6,000頭余のラクダが水不足に悩まされ、グルネー湖では水に含まれるフッ素の量が高くなり、家畜のフッ素中毒が深刻化した。

また、拐子湖区でも高温状態によりラクダが飲み水不足になり、のぼせ発熱し、口から泡を吹き、草を噛むと血を流す状態になった。そのため、拐子湖区のラクダ6,449頭は、雅干山（引用者注：ウントゴル＝ソム北部のモンゴル国国境そば）以西とフフドルシャン（引用者注：マーゾンシャン＝ソム北部のモンゴル国国境そば）一帯に移動された。

西ゴビ地区でも旱魃により水不足、草が少ない状態に。1,700頭余のラクダが疥癬に。

8月29日サイハントーライ公社一帯で雪、雹混じりの暴風が吹く。重災面積は約300km²、20数個のゲルが倒壊し大部分の家畜が風で散った。古楊が倒れるなどで牧草がしなび、家畜の生育に影響が出る（肥える、種付け）。

1981 10月24日、全旗で7cmの積雪。気温は-27℃まで低下。

弱った家畜が死亡に至る。政府は草、飼料用の穀物、油などの物資を畜群点に運び、家畜の救済を試みた。

1990 上半期の降水量は5.5mm。旱魃により連続9年の虫害。

草原劣化が激しく、畜牧業生産が大きな陰りを見せる。

6月の時点で、旱魃、虫害の深刻な草原、森林面積は32,000km²（エチナ旗全土の草場の70%以上に相当）。被災区の牧戸数は543戸、2,334人、家畜は65,342頭（全体の42.3%）。そのうちラクダは19,654頭。また、冬春に組織を通じオトルへ出た牧民は114戸、903人。深災地域の住人の抜粋調査によると、牧民の平均収入は40～50%下落し、中でもウントゴル＝ソムは最も割合が高く平均収入60%前後の下落だった。

1991 政府副旗長の宝音図が、畜牧局、民生局、抗旱蘇部などの要人を連れて、昨年最も被害の大きかったウントゴル＝ソム及び比較的被害を受けたソムを調査する。

ウントゴル＝ソム内の年間降水量は17.6mmで、依然旱魃が続いている。6,846km²の草場のうち85%に当たる5,834km²が災害を受ける。グルネー＝ソム、マーゾンシャン＝ソムに41戸、124人、大畜4,888、小畜1,258頭が移牧。

4月30日～5月1日にかけて霜が降りる。地表の気温は-3℃～-6℃。氷が2cm張る。

作物に大きな被害が出、特にソブノール＝ソム、バヤントーライ農場の被害が深刻。

被害を受けた畑は582.9ha（小麦566.66ha、トウモロコシ7.46ha、瓜菜6.13ha、ゴマ2.66ha）。

1992 旱魃、風害虫害、毒草、家畜の疫病など多数の災害が併発。

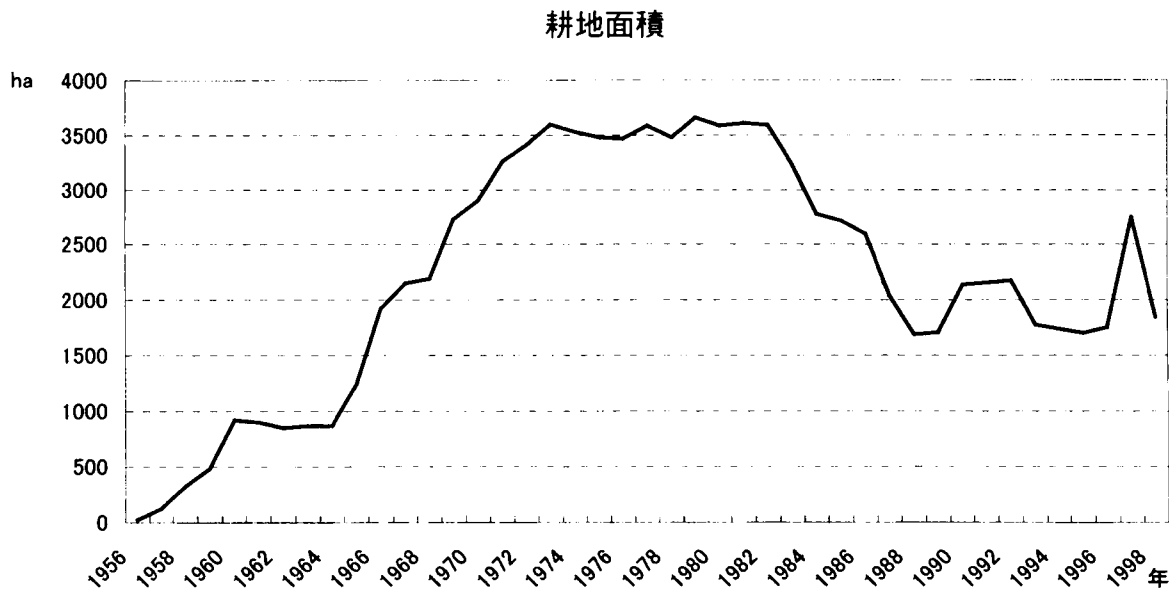
河水が激減した為、畑1,000ha、林地2,800ha、草フレ－666.67ha、7ガチャの草場で未だ灌漑されず。地下水位は大幅に減少し、川沿いの70個の井戸で取水が困難な状態にある。また全井戸の49%にあたる160個の井戸が干乾びている。

草の状態も悪く家畜は草が食べられないため黄疸、脳包虫、黒痢、寄生虫などの疫病が蔓延した。成畜約3,000頭が死亡。政府はソブノール＝ソムの44戸、100人、家畜9,400頭と、ジャルガラント＝ソムの27戸、84人、家畜5,000頭を、大・小ホンゴルジ山、中ゴビ、マーゾンシャン地区に移動させた。

また砂嵐が多く、風力も強かった。全旗で400haの小麦、トウモロコシ畑がなぎ倒されるなどの被害を受けた。9月5日～6日に二日間霜が降りトウモロコシが25～30%減産（内蒙古自治区人民政府参事室〔編〕1988：290、額濟納旗志編纂委員会1998：114-120）。

3-7. 農耕化

・耕地面積の変遷



(額済納旗誌編纂委員会1998：257-258)，(内蒙古自治区統計局〔編〕1991：647)，(内蒙古自治区統計局〔編〕1994：464)，(内蒙古自治区統計局〔編〕1997：543)，(内蒙古自治区統計局〔編〕1999：572)より作成。

コメント：エチナ旗の耕地面積はグラフが示しているように1950年代後半から1960年にかけて急速に広がり，1960年代半ばから1974年まで再び拡大する。そして文化大革命の時期にあたる1980年前半までは広範囲を維持するものの，その後改革解放の時期に急激に面積を減らすという経過をたどっている。しかし栽培作物ごとの歴史的変遷を見ると，この増減傾向が全ての作物に一樣に当てはまるとは言いがたいのである。以下ではエチナ旗で多く栽培されている綿花と瓜類，小麦，トウモロコシを例に各々の作物の変遷を示すことを試みたい。

・綿花栽培

綿花は民国時期に駐在軍などによって試験的に栽培され（額済納旗誌編纂委員会1998：253），その生育の良さが確認されている。

1958年に国営のバヤントーライ農場で試験的に種綿花を0.13haで栽培した所，綿90kg収穫。1963年同農場で，0.07haあたり51kgの綿花が取れ，質も純白で織

維が長く良好だった。しかしこの頃“穀物を要とする”方針であったため、綿花の大規模経営は成されなかった。

1983年後期、生産請負制になり、数世帯の農家が新疆維吾尔自治区から新品種の綿花を導入し、マルチ農法技術（引用者註：畝をフィルムや藁で覆う農法）を推し進め成功を収めた。1997年の統計によると0.07ha当たりの平均種綿収穫量は160kg前後、金額にすると0.07ha当たり1,300元～1,500元に達した。1998年になると、綿花作付面積は666.67haになった（額済納旗誌編纂委員会1998：253より抜粋）。

・瓜

民国時期に、駐旗責任者の役所、駐在軍ならびに策克地区の旅蒙商がスイカ、酔瓜、マクワウリ、カボチャを育てた。

1958年から瓜類の栽培が始まり、主にスイカ、マクワウリが育てられ、メロンがそれに続いた。エチナ旗は地理上特殊な所に位置する。ゴビの為昼夜の温度差は大きく（15℃前後）、熱、光線量共に十分で、降水量は低く（年間降水量は平均37mm）、蒸発量は大きい（年平均3,700mmに達する）。このような特殊な気候条件下、栽培技術を上げ旗内で取れる瓜類の糖度は14%前後となった。

1961年国営バヤントーライ農場における瓜類の作付面積は19.67ha（実際に収穫した面積は14.07ha）、年間生産量は200,000kgであった。同年国営機械林場が瓜類を1.2ha植え、1,700kgを生産。

1962年国営農場は瓜類を11.253ha植え、0.07haあたり平均1,000kg収穫した（額済納旗誌編纂委員会1998：253）（引用者註：つまり168,000kgの瓜を収穫したと推定される）。

1970年代後期～80年代にかけて、次々と新品種が導入される（額済納旗誌編纂委員会1998：253より抜粋）。

1981年バヤントーライ農場の統計によると、瓜類の年間生産量は259,840kg。1983年から1990年の間の瓜類の年間平均生産量は300,000kg以上とされている。

・小麦

1957年、国営チャガントーハイ（引用者註：現バヤントーライ）農場で初めて小麦を試験栽培し、播種面積7.53ha、総生産量7,672.5kg。

1958年以後、不断に耕地面積を拡大。1960年、国営バヤントーライ農場の播種総面積620.87haのうち、小麦の播種面積は335.2ha。小麦の総生産量は279,975kg。

1962年、バヤントーライ農場の播種総面積565.8haのうち、小麦の播種面積は419ha。小麦の総生産量は49万kg。

1963年、バヤントーライ農場の播種総面積591.13haのうち、小麦の播種面積は400.2ha。小麦の総生産量は62万kg。

1964年から1969年にかけて、全旗の小麦栽培面積は年々増加して446.67haから2,280haに、総生産量も1964年の102万kgから1969年の268万kgに増加した。

1980年、全旗の小麦播種は2,393.33ha、総生産は329万kgであった。

1983年、全旗で草原と家畜の請負生産責任制を実施し、農牧業構造を調整、休耕して牧地に戻す作業を進めた。1984年、全旗の小麦播種面積は1,826.67ha、総生産量は191万kgに低下した。

1987年から、旗党委員会・旗政府は徐々に農牧業の生産構造を調整し、今後は全旗の農牧業生産経営方針は「農牧双方重視、多種経営」と確定し、園芸化農業生産を発展させた。1990年、全旗の小麦播種面積は1,066.67ha前後を保持しており、小麦の総生産量は169万kg、穀物総生産量の81.6%を占めている（額済納旗誌編纂委員会1998：247-248）。

・トウモロコシ

1960年以前、エチナ旗では菜園でわずかにトウモロコシが栽培されていた。

1960年、トウモロコシを26.67ha栽培し、総生産は0.65万kgだった。

1961年、トウモロコシを22.53ha栽培し、総生産は0.2万kgだった。この後、大面積の栽培は行われなかった。

1970年より、全旗でトウモロコシを26.67ha栽培し、当年の総生産は1.2万kg

だった。

1980年から1985年まで、全旗のトウモロコシ栽培面積は16.67ha前後で、総生産量は平均2万kgだった。

80年代末、「掖丹系列」が導入され、このトウモロコシの栽培はエチナ旗牧畜業の発展、特に災害対策の家畜保全に積極的な作用を及ぼした。統計によると、1990年、全旗で160haのトウモロコシが栽培され総生産は36万kgに達している（額済納旗誌編纂委員会1998：248-249）。

3-8. 水利インフラの変遷

中華人民共和国成立後の50～60年代、旗工委（引用者註：旗工作委員会か？）と旗人民政府は農牧業用水が日増しに増加するという問題を解決する為に、組織力で用水路を引き、堰を作り井戸を掘り、同時に中小ダムを建設した（額済納旗誌編纂委員会1998：276）。ここでは水利事業を年表の形でまとめ、事業が行われた時期を特化することを目的としたい。

なお、この年表は（額済納旗誌編纂委員会1998：275-281）をもとに作成した。

- 1952 西河ラン河堰（バヤンボグド山内。東河の水量を増やす為に造られた。）
- 1958 チャガートーハイダム（バヤンボグド＝ソム中心地から西南に69kmの所にある。エチナ旗水利部門が建築。）
- 1959 ナリーン河水門（1959年始めに着工し同年12月末に完成。ナリーン河水門はエチナ旗水利局が設計と施工を行った。これはシャルノールダムの貯水を保つ為に遮断する物であった。）
ボードク堰（ジャルガラントソム内にある。1958年から1959年まで建築。）
- 1961 シャルノールダム（ダライフブ鎮から西北に7kmのナーリン河湾に位置する。）
アイグフブダム（バヤントーライ農場内にある。農田灌漑の為に造られる。サイルトーライ河を利用。）

- ハルソハイ水門（ジャルガラント＝ソム内にある。）
- 1963 ダライフブ水門（ダライフブ内に建設。呼和新河の水量を増やす為に造られる。）
- 1965 バルジルオボー水門（バヤンボグト＝ソム中心から西南に35kmの所に位置する。設計上水門通過流量は30m³/s、灌漑可能な草場面積は約1,666ha。）
- 1966 オラントグ水門（バヤンボグトソム中心から西南に50kmの所に位置する。1966年建築。設計上の通過水量は毎秒30m³/s、灌漑可能な草場面積は8,000ha。）
- 1974 バヤントーライ水門（バヤントーライ農場より南に7.5kmの所に位置する。1974年11月建築。水門通過流量は30m³/s、灌漑可能な草場面積は約2,000ha。）
- 1975 労働渠水門（労働渠水門はモンゴル語ではフドウルムル水門と呼ばれている。ダライフブ鎮の南3kmに位置する。南はジャルガラント＝ソムのオラウゲレル水門から始まり、北はアブダルトーライに至る全長4.2kmのものである。季節性の流水。鎮の樹木を灌漑している。設計上水門通過流量は40m³/s、灌漑可能な草場面積は約333ha。）
- 1976 アンドー水門（アンドー水門はムングト＝ガチャ中心から東北へ10kmの所にある。1976年建築。設計上の水量は35m³/s、灌漑可能な草場面積は10,000ha。）
- 1978 オンツ河水門（ジャルガラント＝ソム内のオンツ河口に位置する。オンツ河は東河の支流であり、水はバヤンボグト水門で分流後、104kmを経てオンツ河水門を流れ、ジャルガラント＝ソムとバヤントーライ農場に入り、更に55km流れ最終的にソブノール（東居延海）に注ぐ。甘肅省酒泉地区水利局が設計を請負、エチナ旗水利局が施工した。1977年5月11日に着工し1978年10月13日完成。設計上の輸送能力は270m³/s。下流草原と林地20,100ha、食料用耕地約3,333haを灌漑する。）
- 孟克図水門（サイハントーライ＝ソム、ムングトガチャから南に1.5km

の所に位置する。最大分水量は45m³/s。灌漑可能な草場面積は約13,333 ha。)

1979 ボグト水門（バヤンボグト＝ソムの西南49.5kmの所に位置する。エチナ旗最大の水利工事の1つ。

エチナ旗水利局が設計と施工を行った。1978年8月20日着工，1979年11月10日工事完了。水門の長さは77m，11孔。設計上，最高水流量は875m³/s，門を通過する流量は491m³/s。)

1980 ツェヘー水門（ソブノール＝ソム中心から北へ8.5kmの所にある。1980年建築。設計上，門を通る水量は70m³/s。灌漑可能な草原面積は800ha)

1982 ユグト水門（ダライフブ鎮の北12.5kmの所に位置する。1982年建築。水門通過流量は120m³/s，灌漑可能な草場面積は約1,133ha。)

1989 軍民水門（軍民水門はナーリン河口に位置する。エチナ旗と20基地の駐在軍が共同で1989年より建築。設計上の流量は15m³/s。水門建築後，灌漑可能な草場面積は約9,333ha，農地400haになった。)

3-9. 牧民への穀物供給

清代や民国の時代，エチナザサク旗の人々は水や草求めて動き，肉を食べ乳製品を飲み穀物をあまり消費しない生活形態だった。しかし民国後期，戦火や匪賊の被害，河水の減少により草原が枯れ生活が日増しに困難になり，穀物消費量が増える事態となった。人々は毎日夕食に黍や面片を多食した。当時牧区の販売形態は，牧民が個人個人で甘州，肅州の各県に行き皮毛と穀物を交換するというものだった。董正鈞の《居延海》によると，牧民は一戸あたり毎日黍或いは小麦粉を500g前後消費していたようで，エチナ旗全人民の年間黍消費量は20,953.5kg，小麦粉68,586kgであった。

中華人民共和国成立後の1949年から1953年までは，牧民は依然として近場で穀物を購入していた。1953年2月，旗の供給販売合作社が成立し，穀物と油の販売業務が行われた。1958年以前，牧区では証書なしに十分な量を供給する政策を取られ，牧民は穀物供給地点まで赴き糧食を購入していた。1958年から

1960年、牧区で国家による統一買付けと統一販売が行われた以後、穀物と油の供給に証書を発行するが供給限度量は定めないという政策が取られた。次第に牧区の人民公社所在地に食糧ステーションが設置され、牧民は穀物購入が便利になった。1960年7月、証書で一定量を供給する政策に変わり、同年12月に穀物を統一して供給する方法が実施され、農牧民が得られる穀物の量は月平均15.625kg～21.25kgとばらつきがある結果となった。1964年になると、一人分の食糧15kg／月を基礎とし、一人毎月乾麺菓子をそれぞれ500g上乗せする事になる。1970年になると、エチナ旗牧民の食料について「十分な量の提供、内部のコントロール」政策が執行され、穀物を月標準15kg、食用油を月標準500g与えられた。

1960年より、牧畜地区の供給は全て「定量証書」供給を実行した。つまり生産隊を単位として集団で証書を発行し、集団で購買し、集団で保管し、二次分配するという方法である。1964年以後、食糧ステーションから比較的近い人民公社・生産隊は「世帯に証書を発給し、一世帯一証書、証書により一定量の提供」という方法を実行した。食糧ステーションから比較的遠い生産隊は依然として生産隊を単位とし、集団購入、二次分配という方法を行っていたが、国家は遠距離運輸による損耗と運送費に対して適当な補助を与えた。

1982年以前、旗政府所在地ダライフブ鎮の野菜農家に対する穀物提供は牧畜地区の提供政策に照らして、月ごとに証書により一定量を提供した。1982年、國務院（1982）第8号文書による穀物販売の請負、決定を3年は変更しないことに関する規定により、旗政府は野菜生産隊の野菜農家は食用穀物を生産責任制請負方式で自助解決すべきことを決定し、これにより穀物を自産・自家消費する世帯が増加することはなくなった。

旗人民政府は牧民の食料として供給する品種を優先的に配慮し、3年間の困難な時期には、鎮の住民には毎月55%を雑穀で、牧畜地区の牧民には60%を「細糧」（小麦粉・米）で供給する政策を行った。その品種は主に小麦粉であり、人口に応じて少量の米を供給した。また牧民の生活習慣を考慮し、可能な限り炒りアワを調達して牧畜地区に提供した（額濟納旗誌編纂委員会1998：413-

414)。

3-10. 家畜飼料

エチナ旗牧畜地区での家畜飼料販売は、主に災害対策飼料と家畜が冬と春を越すのに必要な飼料である。1960年、飼料販売は最高の18万kgに達し、1970年、販売量は最低の2万kgであった。災害対策飼料の時宜にかなった調達供給は、エチナ旗牧畜量の発展や災害復旧に重要な物的補保証を与える。災害の年毎に、旗政府の提供する飼料需要量データに基づき、旗の穀物管理部門が人員を組織し、緊急に派遣・運送・積み降ろしを行う。水分の多いトウモロコシについては、乾燥を行う必要もあり、これによって安全な保存を保障する。

供給方法については、災害対策飼料の調達量に基づき、穀物部門が旗牧畜部門と共同で目標数値を割り当て、基層食糧ステーションが目標数値に基づき一定数を割り当てて供給する。1980年以前は、目標数値を各人民公社が生産隊に分配し、生産隊が集団で購入した後それぞれの畜群に分配していた。草原と家畜の請負生産責任制が実行されてからは、目標数値は旗によりソムへ分配され、それぞれの牧民世帯に供給されている。

1982年以前、災害対策飼料の価格は販売価格統制が行われていた。1983年に購入・販売・調達の請負が実行され、1982年の販売水準を規準数量とし、規準数量を超過した部分については元本保証価格・比例価格・協議価格のいずれかによる供給が行われている。

1989年、トウモロコシ市場の管理を強化し、牧畜地区へ家畜飼料を効果的に供給するために、旗人民政府は同年10月6日に「1989年のトウモロコシ購買・販売・供給に関する通知」を發布した。その規定では、

第一、1989年、全旗の各級穀物部門は各自の供給範囲内でトウモロコシを購入する

第二、1989年、全旗のトウモロコシ購入価格はキロ当たり0.54元、販売価格はキロ当たり0.54元とし、旗政府は全旗の干ばつ対策経費から穀物企業に対し1kgのトウモロコシ販売につき0.04元の補助を支給する

第三、全旗の各級穀物部門は牧畜地区でトウモロコシを販売する際、旗外より調達したトウモロコシと旗内で購入したトウモロコシをそれぞれ50%ずつの割合で供給する（額済納旗誌編纂委員会1998：414-415）。

3-11. 畜産品

・ラクダ

1989年の調査によると、産毛量は個体の大きさによって異なるが、年間平均4.5kg得られる。また、中位の大きさのラクダからは肉170～200kg、脂肪15～20kgが得られる。そして、母畜が子畜に与える量は除き一日0.25kg以上の乳が得られる。ラクダの乳は脂肪球が小さく消化吸収されやすい（額済納旗誌編纂委員会1998：201）。

・ヤギ

山羊毛はエチナ旗牧民の重要な収入源となっている（額済納旗誌編纂委員会1998：296）。

エチナ旗における山羊毛の主要な産地は、サイハントーライ、ジャルガラント、ソボノール、バヤンボグト、グルネーソムである。年間平均産量は10,000kg前後で、最も多く取る事が出来た年は40,000kgに達した。一般的に成畜母ヤギの産毛量は0.093～0.115kg、種オス、去勢畜は0.250～0.310kgである。50～60年代はカシミヤの価格は1kg8元であったのが、70～80年代には1kg30～35元にまで上昇した。そして80年代末になると需要が増し、価格はいっそう高騰し1kg200元までになった（額済納旗誌編纂委員会1998：296）

・ヒツジ

産毛量は年間1.5～1.8kgである（額済納旗誌編纂委員会1998：202）。

3-12. ツェヘー（策和）口岸

ツェヘーはアラシャン盟エチナ旗内218号界標附近にあり、ダライフブ鎮か

ら62km, 中モ国境から19kmである。モンゴル国の西伯庫倫（引用者註：シベーフレーカ？）口岸と相對し、ダート道が通じている。ここの自然地理条件は良く、地下水位が高く、水質は良好である。一般に地下水位は4～5 mで、口岸を開く条件を備えている（周〔主編〕1992：134）。

アラシャン盟とモンゴル国ウムヌゴビ県は隣接している。地理・気候的に似通っているだけでなく、風土人情・風俗習慣・言語などの方面でもだいたい同じである。更に重要なことに、双方が経済的に牧畜を主としており、これも双方が辺境貿易を發展させる基礎となっている（周〔主編〕1992：134）。

アラシャン盟はウムヌゴビ県だけでなく、バヤンホンゴル県・ゴビアルタイ県とも隣接し、悠久の伝統的貿易関係が存在しているため、辺境貿易の發展に広範な将来性を有している。また、国内では寧夏・甘肅と隣接しており、寧夏の首府銀川とは100kmほどの距離で、舗装道路が直通している。寧夏・甘肅両省の指導者も策克口岸の早期開通を希望しており、辺境貿易を發展させる上でアラシャン盟の後ろ盾となることを望んでいる（周〔主編〕1992：134-135）。

モンゴル側のウムヌゴビ県・バヤンホンゴル県・ゴビアルタイ県は辺境貿易の早期開通を非常に希望しており、彼らは国境防衛会議における接触の機会を通じて、辺境貿易の早期發展の希望を伝えてきていた。アラシャン盟の烏倫賽盟長が1990年9月に訪モした際、ウムヌゴビ県・ドンドゴビ県との貿易協議が成立し、趣意書が調印された（周〔主編〕1992：135）。

（中村知子）

4. 考察

今回の調査で聞き取りを行ったインフォーマントは過半数が60歳代であり、また、牧畜地域で生活してきたモンゴル族という立場からの発言であるため、彼らが生活体験として把握する「ここ40年の歴史」は、場合によっては文献データの語るリアリティとは齟齬をきたす可能性も否定できない。そこで、本考察では、観察・聞き取りデータに依拠した「共時的・ミクロ的」リアリティと文

献データより得られる「通時的・マクロ的」リアリティを可能な限り相互対照することにより、より立体的なエチナ旗における牧畜社会の理解を目指すことにしたい。なお、本考察にあたり、著者2名の専門分野の違いを反映し、ミクロ的な考察のアイデアは尾崎が、マクロ的な考察のアイデアは中村が担当している。

まず、インフォーマントの分布からエチナ旗の特質を論じたい。今回のインフォーマントは、ゴビに住居を構えていた事例は存在しなかった。これは、彼らの牧地の周囲に作られた「囲い」の材質の大半が灌木の枝を組み合わせたものである、という点にも顕著に表れているといえるだろう。ゴビは基本的に樹木に乏しく、川沿いの土地は対照的に樹木が多い。図2を見ても明らかなように、インフォーマントのホトは全て川（少なくとも、かつては川であった場所）沿いに分布している。尾崎がかつて現地調査を行ったシリングル盟や赤峰市での経験では、牧地の囲いといえば例外なく有刺鉄線であったため、今回の調査において、このような囲いに対して極めて特異な印象を受けたことは否めない。調査ホト近辺に関する限り、平坦な土地であるにもかかわらず枝の囲いにゆえの「見通しの悪さ」が、他のモンゴル地域と比較した場合のエチナ旗の顕著な景観上の特徴である。さらに、冬営地の近くに夏営地を構えている場合、夏営地にも固定家屋が存在することも特徴として指摘しうるだろう。ただし、長距離のオトルの場合は例外なくゲルに居住している。

一方、ホトがほとんど1世帯で構成されることは、現在の内モンゴルにおいて珍しい光景ではない。また、フィールドデータの、3,000～1万ムー（200～670ha）という彼らに分配された土地の広さも取り立てて特異な数字ではない。また、ほとんどのインフォーマントが自らの私有家畜のみを家族労働によって飼養している点も、彼らの所有する家畜数を考慮すれば怪しむに足らない。ただし、彼らの固定家屋は、ガチャ中心地ならずとも、別々のホトのものが数10mという近さで隣接している事例が見受けられた。フィールドデータのNo.1, No.2, No.6などがそうであり、彼らの家畜頭数から考えると、他の世帯の家畜と合流して放牧すれば労働力の軽減になりそうにも思えるが、

No. 1 の親子間での合牧を除けばそうした事例が見受けられないのは、労働力に対する草地、より端的に言えば飼料の高価さによるものであろう。現に、No. 6 に関して言えば、家畜は常に家畜囲いの中で飼養できるようなシステムになっているのである。

なお、歴史的にもエチナの人々にとって「快適な住地」といえば、彼らが「ソハイ（タマリスク）」「ゴル（川）」という名称で代表する地域、つまり川に近い疎林地域である。このことは3-2.で挙げた各鎮・ソムの人口分布において、川沿いに圧倒的多数の人口が集中している事実から推測可能である。また、例えば1926年にエチナ、イフフレーを通過してソ連へ旅行した馬鶴天の旅行記によれば、当時のエチナは「両河（引用者註：黒河下流の二大分流）沿岸のみに人が住んでおり、その他は無人。全境で僅かに120余戸、約400人」（馬1932：30）であり、その川沿いの風景を「茂草密林」（馬1932：22）と形容している。さらに、No. 6 の妻が問わず語りに「ゴビは住めたものではない」と述べていた点や、No. 2 の世帯が家畜分配時に従来の「専門」であったラクダではなく小家畜を受け取り、その結果として川の近くへ移住してきた事実も、エチナの人々の価値観を窺い知る傍証となりうるだろう。そして、かつては移動距離が極めて短かったという季節移動パターンも、豊富な河川オアシスの植生に依存する生業スタイルと合致するものであろうし、彼らの燃料は畜糞ではなくて樹木であるという点も、ゴビでは望むべくもない贅沢となる。なお、運転手の故郷であるウントゴル＝ソムはバタンジル砂漠北辺のゴビであるが、ここは元来アラシャン旗の所属であり（内モン自治区地名委員会1991：187）、その意味で狭義の「エチナの人々」とは一線を画する。

さて、こうしたエチナの人々の「疎林志向」は、現状の家畜選択としての「ヤギ志向」と相応の対応関係にあるものと想像される。現在エチナ旗で飼い得る家畜の大半はヤギとラクダである。両者を比較してみると、家畜頭数推移グラフからも見受けられるようにヤギ頭数は1970年を境に躍進する。一方ラクダは1980年前半を境に減少傾向にある。フィールドデータから見ても、現在エチナ旗で飼い得る家畜の大半はヤギとラクダであるが、その中でラクダの地位

は、No.5のみが相対的に多数のラクダを保有し、その経済性も認めているものの、それでも人民公社解体時と比較して頭数が増加しているわけではないし、No.2は娘に預託、No.6に至っては分配されたラクダを返却していることから見て取れるように、ヤギと比べて低い。ただしこれは、単にエチナの人々の「文化的嗜好性」で解釈するよりは、その収益性から理解すべき事柄であろう。フィールドデータから見る限り、ヤギはカシミアを産出し、肉用として生体を売却しうる点で、抜群の収益をエチナ旗の牧民にもたらしている。これをラクダと比較しても、毛は単価が20倍以上である上、生体としての価格差も平均3倍程度であり、モンゴルにおける一般的な家畜の価値換算体系⁽⁴⁾と比較しても「ヤギ高」という印象は否めない。確かに、3-11.に挙げた1頭あたりの産毛量で比較するならばラクダはヤギの20倍強なので、全て商品化しうると仮定すれば、ヤギとラクダ1頭あたりの毛による収入は等しい。しかしそれならば、毛を得るための手間、ラクダと比較した場合のヤギの増殖率の高さ、そしておそらくは商品化しやすさ（購入する商人が訪問する頻度）などを考慮に入れた場合、「1ラクダ=3ヤギ」という生体価格差以上の収益性をヤギは有していると思なして差し支えないだろう。また、こうした現金収入を優先する状況が、気候条件が悪ければ本来貴重な食料調達方法であるはずの搾乳を控える、という行動を誘発しているのだと解釈しうる。

そしてもう一つの要因として推測できる事は、インフラの整備であろう。ラクダは運搬用としても重要な役割を担っていた。しかし鉄道や道路が整備されトラックなどが流通の基盤になると、ラクダの運搬用としての価値が下がり頭数が減っていく事が予測できるのである。

なお、ここで彼らの食生活について述べるなら、調査時点が冬であったという点を考慮しても乳もしくは乳製品が占める割合が高くなく、また、例えば粉乳を購入してまで毎回スーテーツァイを飲みたい、という嗜好も存在しないようである。また、鶏卵など、定住民的な食材も取り入れられている。ただし、彼ら自身、乳製品を作る気がないというより、豊富に乳が出る条件が整わない限り搾乳しないという選択であり、フィールドデータを見る限り、夏季のオト

ルを行っているインフォーマントの世帯は乳に恵まれたようで、自家製の乳製品が見受けられた。なお、No.7のように飼料を与えてメスウシを飼養し、その乳で乳製品を作ることは、文化的嗜好性に支えられた行動とはいえ例外的な贅沢である。

しかし、エチナ旗の現状では、収益性云々を論じるまでもなく乾燥に強い畜種であるヤギとラクダしか飼えないこともまた事実である。こうした外的制約としての自然環境が歴史的要因により作り出されているのである。その背景としてエチナ旗のモンゴル族に認識されているのは、農耕化による水と土地の減少である。それは、1960年代より漢族が流入し、エチナ旗の水と土地が農業に振り向けられていくという直接的な農耕化に加え、黒河上・中流の甘粛省内におけるダム建設に伴う水の収奪という間接的な農耕化という二重の意味での農耕化の影響である。

この農耕化は、内モンゴル全体の文脈で見れば、ここ40年ほどの間に農耕化が進展した地域に良く見られる「漢族移民による農耕化、沙漠化、民族関係の悪化」という一連の現象群のバリエーションとして位置付けが可能かと思われる。しかし、エチナ旗の農耕化をめぐる問題の本質は土地以上に水であるという点で、土地が問題の中心となる傾向が高い草原地域とは異質の、河川オアシスとしてのエチナ旗の個別性・特殊性を指摘することもできるだろう。そもそも、エチナには中ソ対立時代、最前線として相当規模の軍隊が駐留していたことがインフォーマントの語りの中からも想像しうる。それゆえ、内地から漢族の一般農民が大量に流入し、土地をあまねく「開墾」という状況は展開し難かった地域である。確かに、人口統計グラフを見ると、1960年の顕著なピークを除外して考えても、1960年代と70年代の人口増加率はそれ以前、それ以後よりも若干高い傾向が見られる。ただし、耕地面積グラフとの連動状況を見ると、「農民が大挙して押し寄せた」と解釈可能な現象は、上で除外して考えた1960年前後の状況のみであり、その他の状況には必ずしも相関性があるとは考えにくい。

一方、エチナ旗のモンゴル牧民が指摘する農耕化の代表的な作物が、水を大

量に消費する綿花であるという点も示唆的であろう。綿花は実際には、文献情報にもある通り、83年以降に作付面積が増大する作物であるし、その絶対的面積も80年代においてすら全体の1/3程度である。つまり、綿花は、単なる耕地面積ではなく、牧民に対するインパクトの大きさが問題となるといえる。実際、この綿花という存在は、皮肉にもインフォーマントの中で、自家用車や携帯電話を所有するなど、桁違いの裕福さを感じさせるNo.6の富の源泉となっている。彼の所有する100ムー（6.7ha）の畑からもたらされる収入に関する自身の言及はないものの、No.2が3ムー（0.2ha）程度の畑から2,900元の収入をあげている点から単純類推すれば、9万元もの収入が見込めることになる。しかも、耕地は必ずしも自分で耕作する必要はなく、漢族農民に貸し出すことも可能である。また、No.2の証言より、それが旗政府によって推奨されていることも伺える。その意味で、エチナの人々にとって農地はアンビバレントな存在である。農地を持つ者と持たざる者の差は、飼料を自らの農地で耕作し始めている現状から考えて、今後増大していくものと想像される。そうした牧民にとって「身近な農地」の先鞭が綿花であった、ということであろう。

一方、家畜を放牧するという、本来の意味での牧民としての彼らにとって最大の問題関心事は、河川流量の減少や地下水位の低下に伴う乾燥化と草の悪化なのであることは、地下水位の減少に関する具体的な数字を挙げての指摘や、水が無ければ土地など役に立たないというNo.4の言説にも端的に現れている。また、水質悪化に関する彼らのコメントが多いことも、水に対する関心の反映と解釈できよう。ただし、井戸の水質については、単に地下水位の低下に起因するものだけでなく、管の老朽化による水質悪化という要素も多分に考慮する必要があると思われるので、専門的な水質調査の結果との照合も必要であろう。

ところで、エチナ旗のモンゴル牧民にとって、現状認識を述べることはまさに「消滅の語り」としか言いようがない、という印象は否めない。家畜は現在減りつづけており、また望むと望まざるとに関わらず、減っていくものであるかのごとくである。それでは、彼らの記憶する「良かった時代」とは一体いつであろうか。これについては「遠い過去」と「近い過去」の、二つの準拠点

が存在すると思われる。まず、「遠い過去」であるが、これは漢族流入以前、モンゴル族だけがゲルに居住し近距離移動をし、砂嵐は無く雨や雪も降り、河水・湖水が通年存在し地下水位も高く草が豊かであったという景観、あるいはウシやウマが存在したという畜種の記憶によってイメージされている時代である。あえて具体的な年代に当てはめるなら、1960年代までのインフォーマントが若かりし頃の記憶であり、質的な記憶である点に特徴がある。

一方の「近い過去」の記憶は、むしろ具体的な家畜頭数などによって語られる、量的な記憶である。現在のインフォーマントの家畜数を見ると300頭が多い方であるが、「85～90年ころ、600頭はヒツジ・ヤギがいた」(No.7)、「80年代にはガチャでヤギが1万頭、ラクダが900頭いた。現在はヤギが3,000頭、ラクダが400～500頭にまで減っている」(バヤンボラグ＝ガチャ長)、「83年に家畜を分配する前には、1世帯で400～500頭の家畜を放牧していた」(No.3)など、「80年代は今より2倍程度家畜が多かった」という記憶は共通しているように思われる。もちろん、人民公社解体以前の80年代初頭がピークか、解体直後の80年代後半がピークかという差異は看過し得ないものであることは疑いない。しかし、今回のフィールドデータからは確言不可能であるため、さしあたり、80年代が家畜頭数のピークとして記憶されており現状はそれが半減している、という事実を指摘するに止めておきたい。

そして、この家畜の減少傾向をもたらしているのは、牧地だけでは家畜を飼養しきれず、何らかの手段で飼料を確保しなければならないという現状及び、その現状を認識した上での「放牧禁止令」と呼ぶべき政策である。これに対するエチナ旗の牧民の積極的な対応が、牧地の回復を期待せず自ら飼料生産を手がけ、できれば改良品種のヤギを導入して収益性を向上させようとする動きである、と解釈できよう。なお、文献データから見ても、ヤギの品種改良だけは過去、成功した事例が存在するため、この試みには一定の合理性があると言えるだろう。

さらに、文献資料から得られる情報は、これに裏付けを与えてくれる。まず、家畜頭数の変遷を見ると、確かに50年代半ば～60年代半ばと80年代がピークを

形成している。この意味で、彼らの質的な記憶は、それなりに量的な裏付けが存在することが見て取れる。ただし、それでは何故そうなったのか、文献データはヒントを与えてくれるだろうか。

まず、飼料販売量から見ると、60年が最高で、70年が最低であったとの記述がある。両者の差は9倍に達する。一方で、64年から69年にかけて、食糧としての小麦が大増産されている。そして、水利インフラを見ると、66年から74年までのブランクが存在する。なお、耕地面積は72年から10年間でピークとなっている。これらの事実を総合すると、60年代の特に後半を通じて、食糧生産としての農業重視、牧畜軽視への政策シフトが発生したと考えられる。特に、水利施設を増設せずに食糧増産を図ることは、牧地の圧迫を意味するだろう。もっとも、70年の家畜頭数の激減は、文化大革命という政治動乱を最大の要素として想定するべきものだと思われるが、その後の回復率が50年代の家畜増加率と比較して緩やかである点は看過し得ない事実である。また、人民公社が解体すると同時に農地が牧地へ戻されたとする点も、それ以前は無理に食糧生産を目指していたことが伺われる。

そして、80年代後半に、もう一つの転機が訪れることになる。この時期になると、旗政府は再び農業重視と思えるスローガンを掲げることになる。また、飼料としてのトウモロコシの導入についても、政府による価格統制など、政府主導を感じさせる。そして、統計は存在しないので牧民の記憶に頼ることとなるが、この時期より牧畜は縮小再生産の一途を辿ることになるのである。あくまでも想像の域を出ないが、この背景には綿花の導入、あるいは上流の取水強化による水資源枯渇、もしくは双方の要素が原因となる、牧畜セクタへの水資源配分量の減少が存在するのではないかと思われる。そして、政府サイドにとって、限られた水資源を最大限「効率的」に利用する方策として行き着いた結論は、放牧の放棄であり飼料作物栽培に依存した牧畜業の推奨だったのではないだろうか。なお、80年代には自然災害の報告が皆無であるが、この点も牧民が80年代に対して抱く好意的なイメージと整合的である。

さて、こうしたエチナ旗における変化の様相を見るにつけて、エチナ旗にとっ

ての甘肅省の圧倒的なプレゼンスを認識せざるを得ない。3. で挙げた年表でも明らかのように、文化大革命の時代にエチナ旗は10年間甘肅省の領域内に組み込まれており、その時代に漢族幹部と漢族農民が流入したという直接的な影響を受けたことはフィールドデータからも確認できる。また、それだけでなく、この地域にとって生命線とも言える水が黒河の上中流地域を押さえる甘肅省に存在する数多くのダムによってコントロールされているという意味において、モンゴル牧民の生活に対する隠然たる影響力が現在なお存在しているのである。

しかし、それでは、エチナ旗における状況全般は完全に甘肅省という「南の隣人」との関係のみで説明可能かという点、必ずしもそうとは言い切れないだろう。もう一方の「北の隣人」であるハルハ、具体的にはゴビ地域との関係も考慮すべき一要素である。馬鶴天の移動ルートがまさにそうであったように⁽⁵⁾、古来よりエチナからハルハ地域へ北上する道が存在し、それが政治的な動乱期には越境逃亡の1ルートとなっていたであろうことはNo. 4の家族の事例からも確認しうる。また、文献資料にも指摘があり現地調査でも体感し得た、エチナ旗の人々が話す極めてハルハ的なモンゴル語も、ハルハとの関係の深さを示唆する傍証となり得るように思われる。確かに、ここ40年の歴史に限定すれば、北への道は閉ざされていたことは事実である。しかし90年代後半より、ウムヌゴビ県ゴルバンテス郡との間に口岸、つまり通過可能な国境が開かれることにより、両地域の交流は再開している。国境の向こうのウムヌゴビ県西部はモンゴル国でも最も人口希薄であり、エチナ旗と同等かそれ以上に「辺境」であった地域である。文献資料からも、モンゴル国側「辺境」地域の口岸に対する期待が伺える。この両「辺境」の出会いが、今後両地域における社会変動の要因として如何に機能していくかは、将来的な研究テーマとして極めて興味深い。

本調査報告は、平成13年度稲盛財団研究助成「モンゴル牧民の脱移動民化に伴う社会・文化的変容に関する比較研究」（研究代表者：尾崎孝宏）の成果の一部をなすものである。

註

- (1) エチナ旗は、年間平均降水量37mm、蒸発量は3,700mmに達する乾燥地域である。祁連山に源を発するエチナ河（引用者註：黒河下流域の名称）の水が、これまでエチナ地域における人畜の共存と植物の生長を支えてきた（額済納旗誌編纂委員会1998：275）
- (2) 現地のモンゴル語による発音は「ソゴノール」に近く、1926年の馬鶴天の旅行記にも「蘇姑淖」と明記されていることから（馬1932：35）、現地での名称は少なくともここ数十年間「ソゴノール」であることが看取できる。一方、現在のオフィシャルな漢字表記は「蘇泊淖爾」であり、これはモンゴル文字表記の「ソブノール（sobnaGur=かわうその湖）」の音訳である。本稿では表記上の混乱を避けるため、便宜上「ソブノール」という表記で統一してあるが、実際の聞き取り調査では「ソゴノール」として言及されており、また「ソブノール」と表記することにより何らかの立場性を表明するものでもないこととお断りしておく。
- (3) この「1つの場所」とでも直訳しうる表現がいかなる広さを表すかは未確認であるが、おそらく、具体的な広さの単位というよりは「1地方」という程度の意味であろうと想像される。
- (4) 例えば、ハンフリーの挙げているモンゴル国の地方の専門家に使用されている換算率では、ヒツジを1としてヤギ0.9、ウシ5、ウマ6、ラクダ7である（Hu mphrey & Sneath 1999：309）。つまり、「1ラクダ=7.7ヤギ」となる。
- (5) 馬鶴天はエチナから北上してゴビを横断し、サインノヤン=ハン旗を經由してイフプレーに到達している（馬1932）。

参考文献

- 額済納旗誌編纂委員会 1998 『額済納旗誌』北京：方志出版社。
- Hu mphrey, Caroline & Sneath, David 1999 *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*. Durham: Duke University Press.
- 馬鶴天 1932 『内外蒙古考察日記』南京：新亜細亜学会。
- 内蒙古自治区地名委員会 1991 『内蒙古自治区地名志 阿拉善盟分冊』n.p.
- 内蒙古自治区人民政府参事室〔編〕 1988 『内蒙古歴代自然災害資料統編』n.p.
- 内蒙古自治区統計局〔編〕 1991 『内蒙古統計年鑑1991』北京：中国統計出版社。
- 内蒙古自治区統計局〔編〕 1994 『内蒙古統計年鑑1994』北京：中国統計出版社。
- 内蒙古自治区統計局〔編〕 1997 『内蒙古統計年鑑1997』北京：中国統計出版社。
- 内蒙古自治区統計局〔編〕 1999 『内蒙古統計年鑑1999』北京：中国統計出版社。
- 周徳海〔主編〕1992 『内蒙古口岸』呼和浩特：内蒙古人民出版社。